

筆者の前々回の「理想」を
読んで、次のテーマは「絶対」
かなと思つた勘のよい人もい
たかもしれない。確かに、絶
対安心は理想だが、絶対絶命
もあるから気を付けなければ
ならない。

いずれにせよ、あらゆる制
約から一切自由で、比べられ
たり競争したりするものが他
にないことは、ものごとを考
える際の出発点になる。つま
り純粋で、余計なものが一切
入っていないから本質が見
え、はっきり理解できること
が多い。

そんなことを考えながら絶
対を冠する単語を見たら、温
度、湿度、空間、回転、高度、
音感、屈折率、誤差、真空、
重力、真空、測定、等級、年
代測定、配置、反応速度論、
連続、など山のように出てき
た。これらを並べて眺めてい
ると、絶対が持つ大切な意味
が何となく分かってくる。

絶対に対立する概念は、相
対だ。われわれが日常使って
いるセ氏温度(°C)は1気圧
での水の融点を零度とする
相対値だ。それに対し、絶対
温度目盛りでの零度は「熱運
動の完全消滅状態」という物
理学の基本量に基づいた、完全
な定義を持つている。
絶対空間というのもある。

サイエンスの「絶対」 本質見える、純粋な状態

歴史的には、全宇宙を満たす
として仮想された物質のエー
テルに対して静止した絶対空
間が考えられた。アインシュ
タインの相対性原理は、この
いわゆる慣性系は唯一のもの
ではなく、無数に同等なもの
があるとしてその絶対性を否
定した。なお、相対性原理の
ゴールに最も近かった大学者
ローレンツは、絶対時間の否
定ができなかったのでアイン
シュタインに先を越されてし
まった、といわれている。

絶対真空というのが出てき
たので、真空に絶対も相対も
ないだろうと思つて調べた
ら、工学的・技術的には大気
圧より低い圧力の状態を、広
い意味で真空と呼んでいる。
物質のまったくない空間が絶
対真空・理想真空だが、この
状態を作り出すのは現在、不
可能とされる。

なお、私の日常的な拙い経
験から言うと、議論していて
さしたる根拠もないまま絶対
が主張されたら、それ以外に
類をとらえがなくなつたこと
を白状しているようなものだ。
大体は肩唾物と考えてよい
だろう。だから私は、絶対
という言葉を使いたくなくな
る使わぬ。

(東京大学名誉教授
和田昭允)

平成 28 年
6 月 3 日

人類は誕生以来、ものごと
を見ては理解する努力をし、
それを周りに説明してきた。
理解は個人それぞれで頭で
し、説明はそれを他人に伝え
る。伝える言葉は、その意味
が相手のそれと正確に一致し
ていなければならない。だか
らこそ人類の知識体系が一本
化し、先へ先へと伸び続けて
いる。理解と説明を組織的に
する文化活動、とくに教育が
持つ意義は大きい。

欧米の大学教授は、学問を
社会に広く解つてもらおう
と、並々ならぬ努力をする。
私は米ハーバード大学で、市
民向けの講演や執筆の心得
を次のように教わつた。聴衆
・読者は、この話題に関する
知識は持っていると思え。
聴衆・読者の知性は様々だと
考えよう。そのうえで、聴衆
・読者一人ひとりの知性が、
一段上のレベルに高まるよう
に説明する努力をせよ。

これは説明する相手につい
てだが、説明する物事の、ど
の側面に焦点を当てるかにも
様々な局面がある。
きれいな花が咲き誇る大木
を目に浮かべていただきた
い。これをどう説明するか。
まず、幹があって、それから
枝が出て、梢(こすえ)には
ピンク色の花が無数にある、
といった説明ができる。場合
によっては、枝の分かれ方や、

説明のポイント 歴史や社会的面も不可欠

花の数などの詳細も言わなけ
ればならないだろう。
別の観点として、この木が
一粒の種として地面に植えら
れてから今日までの、成長の
歴史を話すことも必要だ。そ
して、花の後に成る果実は商
品になる、など社会的側面も
欠かせない。

一方、秋になると葉が落ち
て、掃除が大変だといったマ
イナス面もある。この大木を
人類の歴史上の偉人や大事業
に置き換えても同じことだ。
全ての場合に、この理解と説
明の多面性への配慮が要る。
木の形や花の色などは単なる
描写にすぎないから、学校
での理科教育がこれで終わっ
てしまつては困る。少なくとも
背景(歴史)の説明は必要
だ。そして「社会における意
味」の説明をしなければ、画
竜点睛(がりようてんせい)
を欠く、となる。

世の中の知識は全てつなが
りを持っており、ネットワー
クを作つて、網目状に広がっ
ている。これを、高い視点と
広い視野を持って俯瞰(ふか
ん)して全貌を示し、その詳
細を説明し、またそれらがど
のように全貌につながるか
—といったことを行きます
ば理解が深まり、本当の説明
になる。

(東京大学名誉教授
和田昭允)

平成 28 年
6 月 7 日

「コンテキスト」は深い意
味を持っている。文脈と訳さ
れることが多いが、もっと広
く脈絡、前後関係、状況、背
景などを総合する含蓄のある
言葉だ。

日常のコミュニケーション
でわれわれはいつも、相手の
会話や表情が持つ意味を解説
している。その解説には、語
句の組み合わせや表情の動
きを、それらが示す意味に翻
訳するコード(情報を表す記
号の体系)が要る。

言語では、その関係は辞書
や文法書に形式知で載ってい
るが、一般には社会的経験を
通じて共有されたコードが暗
黙知としてある。暗黙知だか
ら、短い発言では複数の意味
が候補に挙がってしまう。
たとえば「ダンスは面白い」
と言つたとき、自分が踊るの
が面白いのか、ライオンダン
スを観賞するのが面白いのか分
からない。でも、話の前後の
つながり、つまりコンテキス
トを参考にすると、意味を
正しく解説(コード)でき、
いちいち説明をしなくても話
を進められる。

そんな理由からコンテキス
トは、文脈などと矮小(わい
しょう)化することなく「も
のごとを総合しての基本的構
造」と考えるのが本当だ。一
橋大学の野中郁次郎名誉教授
は、その意味でのコンテキス
トを正確に把握し、正しく分
析する人間の能力を「賢慮」
と名付けて知的活動の最高位
に置いている。

コンテキストを把握 知的活動の最高位「賢慮」

この賢慮とは、そもそもア
リストテレスが三つに分類し
た知識の一つだ。コンテキス
トそのものを作ることも含
み、方向付ける。ほかの二つ
の知識は、エヒステメ(認
識と呼ぶ科学的合理性を基
礎とし、時間・空間によって
左右されないコンテキスト独
立的な客観的知識(形式知)
と、テクネ(技能)だ。

アリストテレスの知識の三
分類は、この賢慮の概念に総
合されるとしている。明治の
近代国家を建設し、そして
第2次世界大戦敗戦の惨状を
克服して科学技術立国を目指
した日本人には、この賢慮が
確かにみられた。今もそうあ
つてほしい。

(東京大学名誉教授
和田昭允)

平成 28 年
6 月 14 日